日本平 遊木の森

里山の自然を体験しよう！

遊木の森では、
里山の自然に触れて、
実際に体験できるよう、
1年を通じて様々なプログラムが
用意されています。
里山がどのように利用されてきたのか、
実際に体験してみましょう。

アカメガシワ（赤芽柏）

アカメガシワは宮城県、秋田県より南に生えるトウダイグサ科の落葉高木です。「カシワ」の名がありますが、ブナ科のカシワとはまったくの別物です。葉の形もカシワとは似ていませんが、昔この葉に食物をのせて神前に供えたり、だんごを包んで蒸したりと、柏の葉と同じように利用されたことからカシワの名が付けられたそうです。アカメは赤芽で、新芽があざやかな赤い色をしていることからきています。
雌雄別株で、5月から6月頃、多数の小さな花が集まった花穂を上に向かって突き出します。

クリ（栗）

クリは北海道から九州まで、
日本中に分布するブナ科の落葉高木です。クヌギやコナラと並んで冷温帯下部から暖帯にかけての二次林を代表する樹木とされます。6月頃、細長いひも状の雄花を伸ばし、木全体が真っ白に見えるほどになります。秋にはいがが割れて栗の実が顔を覗かせます。栗の実を採るため、栽培品種がたくさんあります。

コナラ（小楢）

コナラは北海道から九州まで分布する、暖地の雑木林を代表するブナ科落葉ナラ類の落葉高木です。萌芽再生能力が非常に高く、伐採されても切り株から「ひこばえ（萌芽）」を形成して再生します。このため、かつてはクヌギと並んで薪炭材としてさかんに伐採され、二次林（山火事や伐採などで、原生植生（一次林）が破壊されたあとに生じる森林）を構成する代表的な樹種となっています。

シキミ（樒）

シキミは宮城県以西に生育するシキミ科の常緑小高木で、仏前に供えられる木として有名です。葉に独特の香りがあり、線香や抹香に使われます。「抹香臭い」という言葉はシキミの香りをさしているそうです。また、株全体に毒があり、特に果実には毒成分が強いため「悪しき実」から転じてシキミと呼ばれるようになりました。仏前に供える毒のある花とはなかなかおどろおどろしいものですが、花はなかなかきれいなものです。

クロガネモチ（黒鉄黐）

クロガネモチは、関東以西の暖地に生育するモチノキ科の常緑高木です。葉は楕円形で鋸歯（縁のギザギザ）がなく、革質で光沢があります。雌雄異株で雌株には赤い果実がたくさんつくため、庭園木や街路樹としてよく植栽されています。
5月～6月ごろ淡い紫色から黄色の小さな花をたくさん咲かせますが、あまり目立ちません。秋になって、実が赤く色付いて初めて気づくことが多いようです。ひとつ一つは小さな実ですが、これらがいくつも集まって青い葉の間から顔を覗かせる姿は見事です。

ヤマモモ（山桃）

ヤマモモは関東地方より西に生えるヤマモモ科の常緑高木で、庭木や公園木としてもよく植えられています。雌雄別株で、果実は6月から7月頃赤黒く熟し、食べられます。果実酒やジャムなどに加工されることも多いようです。あまり日持ちがしないので、広い地域に販売はされませんが、地元消費型で徳島県や高知県などでは地域の名産品となっています。

エノキ（榎）

エノキは本州から九州に自生するニレ科の落葉高木です。谷沿いなどの水分条件の良好な場所によく生育します。花は4月ごろ咲きますが、あまり目立ちません。直径5～6mmほどの果実が秋に赤く熟します。エノキの葉にはよく虫こぶができます。この虫こぶの中にはタマバエの幼虫が入っていて、5月から6月に虫こぶごと落下してしまいます。エノキは昔、街道の一里塚に植えられました。今でもエノキが残っている一里塚もあります。